

## 富山の風土とタテヤママリモ

立山町野口地区の民家の池に生育している変わった藻類が富山市科学博物館(当時は科学文化センター)に持ち込まれ、専門家によってマリモであると分かったのが1987年のことでした。当時は阿寒湖のマリモと同じ種と考えられましたが、後に、遺伝子の分析によって阿寒湖のマリモとは別の新種であると分かりました。まだ新種登録がされていないので正式な名前はありませんが、研究者はタテヤママリモと呼んでいます。阿寒湖のマリモと同じ種は北ヨーロッパなどにも広く分布しているのに対し、タテヤママリモは、現在まで、日本でしか見つかっておらず、しかも、立山町の他、国内数カ所の湖や湧き水が流れる用水で見ついているだけのたいへん希少な種です。

マリモは湖の中では、水草や藻類が生育しにくい、光の弱い場所に生育しますが、タテヤママリモは阿寒湖のマリモと比べると明るい場所に生育します。この民家の庭にはタテヤママリモが生育する池が全部で6つあり、写真の池以外は、遮光ネットをかけて池の明るさを調節しています。最近、これらの池で2つの問題が出てきました。一つは水の問題で、写真の池の排水口が詰まって排水ができなくなり、常時入れていた地下水をしばらく止めたところ、この池とこの池の排水を流し込んでいた池のタテヤママリモが弱ってしまいました。もう一つは光の問題で、池の遮光ネットが古くなって池が明るくなり、他の藻類が繁殖しはじめました。この藻類を退治するため、遮光を強くすると、問題の藻類はいなくなりましたが、今度は暗くなりすぎてタテヤママリモも弱ってしまいました。これらの問題から、タテヤママリモの生育には地下水を絶えず流すことと、光の管理が重要だと分かってきました。光の管理については、現在調査中ですが、遮光ネットを2枚重ねにし、池の上の明るさを外の明るさの1/10程度にするのが良さそうです。

最初にタテヤママリモが発見された下の写真の池は、地下水が導入されており、防風・防雪林として家の



タテヤママリモが生育する池

の南側に植えてある屋敷林の大きな杉の木陰によって、タテヤママリモの生育にちょうど良い明るさになっていたため、自然にタテヤママリモが増えたようです。しかも、この地区は、常願寺川扇状地の地下水が湧き出す地域で、タテヤママリモはもともとこの地域で生育していたものと考えられます。こんなことから、富山の農村の風土がタテヤママリモを育ててきたと考えることもできます。

2011年8月 朴木英治